

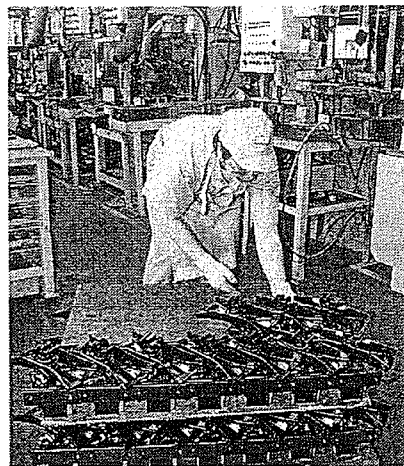
select nippon

景気 ウオツチ

「納期がどんどん短くなってきている。この一年間だけでも一割短縮された」(金型メーカー)。中小の部品、金型メーカーは指定の納期に間に合わせようと、大筋の仕様が内示された段階で原材料を手配。ところが正式な発注書では仕様の変更、調達した材料が使えない場合も多い。大きなコスト圧迫要因となる。

七千の工場が集まる大阪府東大阪市。不況で廃業が相次いだ工場街も昨秋以降、自動車関連の需要増などで少しずつ活気を取り戻し始めた。だが、中小経営者の表情はさえない。「忙しいけど、もっからん」。値下げ圧力に加え、大手メーカーのもう一つの要求が厳しさを増している。

中小製造、短納期に悲鳴

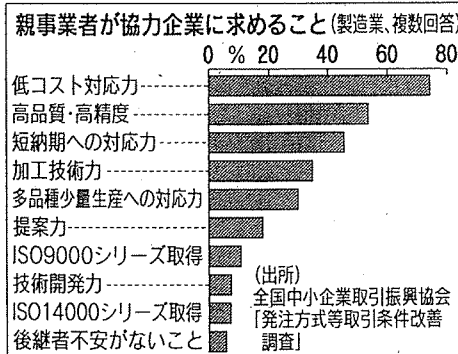


中央製機(静岡県富士市)は「作りすぎの無駄」排除に取り組む

新製品開発競争の激化で大手企業はより短納期を要求、中小メーカーはもろに納期への対応力」を求めている。納期短縮は中小メーカー共通の頭の痛い問題だ。価格下落と短納期によるコスト増で、「一台あたりの粗利は以前の需要拡大間だった納期が現在は一週間は「一九九〇年代なら三十日あった納期が、今は十日まで縮まった」。

全国中小企業取引振興協会(製造業、複数回答)の二〇〇五年度調査では、発注側の企業の四六%は、協力会社(下請け)に「短納期への対応力」を求めている。しかし、立場の弱さで不透明な取引慣行から、「その契約を求めてもはね返される」。東大阪市では「納期の延長をお願いする」と、損害賠償を請求された例もある。

「仕様の内示後に手配して無駄になった材料は、調達コストを発注先に負担してほしい」。下請け企業の航空機部品製造、アオキ



景気拡大でも粗利半分

(東大阪市)の青木豊彦社長は「特殊鋼は今もこちらの求める納期が守られないことがある。来年初めから次世代航空機の生産が本格化する」と、さらに納入が遅れるのではないかと心配」と話す。中小メーカーは大手からは短納期を突きつけられる一方、材料メーカーへの納期短縮要求は通りにくく、板挟み状態だ。

状況打開のため自衛手段もとり始めた。アルミ加工の中田製作所(大阪府八尾市)は原材料のアルミの納品遅れに加工時間の短縮で対応しようと、近く切削用のマシンングセンターを二台新設する。

金利上昇局面での五千万円前後の設備投資は年間売上高が四億五千万円の同社にとって痛手だが、「高品質と短納期を両立できれば新規顧客の獲得にもつながる」と中田社長は意気込む。土日返上で準備作業が

トランク・バス用のスペースに「作りすぎの無駄」への情熱がある余り、往々にして『作りすぎの無駄』を生んできた。あえて作らない勇気も必要」と渡辺哲史社長は話す。調達先を巻き込んだトヨタ自動車流バン方式も視野にある。

原油高や原材料価格の高騰もあって中小製造業の経営環境はますます厳しくなっている。苦境をバネに競争力を高める企業と、手をこまぬき低迷を強いられる企業への二極化が進む可能性がある。

(静岡支局長 水野裕司、東大阪支局長 大西穰)

日本経済新聞(2006年8月21日)に、中央製機(株)の取り組みが紹介されました。

06.8.21

~8.E

社長